

遙かなる風雲

②

実録・柴田音吉洋服店

欧風文化の潮満つ——向うっ気の強い少年

音吉が青雲の志を抱いて兵庫へやってきたのはいつのころか、つまびらかではない。

明治6年、徴兵令発布の前後まで、元服—成人の年齢は土地により、時代によって多少の差はあれ、15才前後とされていたことを考え合わせると、音吉がひとり近江の国から出てきたのはあるいはその年齢であったかもしれない。

音吉15才といえ、年号が明治に改まったその年である。とうとうたる欧風文化の波が、崩れ落ちた壁を越え、みる間に日本中を席巻していく、その活力にみちた「明けゆく年」であった。

明治を支え、伸ばした進取的なひとびとと同様、音吉少年もまた時代の申し子のような活力に満ちた、行動的な若者であったようだ。

当時の出版物に、1割が真の開化の人、8割が程度の差はあれ開化的な人、残る1割が開化に背を向ける人というようなことが記されている。

音吉少年は時代を受けとめるに懐疑的な性格ではなかった。むしろ積極的に時代に向かって突き進んでいった1割の「真の開化人」のひとりであったろう。

× ×

いい伝えによると、近江から兵庫の港町にやってきた音吉少年は、スキップというドイツ人経営の商社に身を置き裁縫を学んだ、という。この道に入った年代ははっきりしていないが柴屋家養子入り後のことであつたらしい。

兵庫在住の庄屋、柴屋金左衛門の一人娘くまは縁あって近江商人の息子音吉を養子に



創業当時の柴田音吉洋服店(内部)

迎えることになった。嘉永6年、音吉と同じ年生れのくまは、武家屋敷での行儀見習いを終えたばかり、匂うようなつましい風情であったと伝えられる。苗字帯刀をゆるされた格式ある金左衛門の邸は、その日いつもとは違った華やいださぎまきに満ちていた。養子候補である音吉の到来が告げられたからである。

奥まった一室で、金左衛門はことのほか上機嫌だった。

目の前にかしこまっているまだ紅顔の、将来婿たるべき青年が気に入ったからであった。「近江か」と金左衛門はいった。音吉の故郷を話題にした。思いやりである。「近江の海夕波千鳥なが鳴けば心もしぬにいにしえおもほゆ」朗々たる古今集の一節が少し盃を傾けた金左衛門の口をついて出た。

「その歌は、わたしの性に合いません」紅顔の若者はきくと金左衛門を見つめた。思いがけない、落着いた大きな音吉の声に、金左衛門は持っていた盃を宙に据えた。

「いにしえ思ほゆ、というのが性に合いません。わたしは、古いものより新しいものが好きです」。

「庄屋が、性に合わないか」「そうではありません。この地の利があれば、新しい事業が出来そうな気がするのです」。

金左衛門は盃を置き、まだあどけなさの残っているこの向うっ気の強い若者の目をじっと見た。「ほう、それはどんなことかね」。「洋服屋です。西洋人の着ている、あの洋服をつくる店です」。

× ×

新時代の洗礼を受けるに積極的だったこの青年を、受けとめて立った庄屋、金左衛門の度量を、後年人はひそかにほめそやした。

文明開化のいちばん手っとり早い、そしていちばん効果的な教養方法、演出方法は服装であり、事実、何より早くひとびとは、便利で活動的な西欧の服装をとり入れつつあったのだった。

柴屋、のち改姓して柴田となった入婿先で、音吉はのぞみ通り庄屋業のかたわら、洋服仕立業を学んでいく。

この「新らしがり」と行動性。は、長く晩年に至るまで柴田音吉の生涯を貫いたバック・ボーンになった。

(つづく) 岡和子記者